

IV部 基調報告 新羅郡関連の状況

「高麗郡建郡の背景」

講師： 中 野 高 行

（日本高麗浪漫学会理事）

平成30年11月25日（日）
於 和光市民文化センター

高麗郡建郡の背景

報告者 中野高行

1. 高麗郡関係史料について（赤木隆幸氏の解説による）

○『続日本紀』靈龜二年（七一六）五月辛卯条

〔本文〕

辛卯、以_二駿河・甲斐・相摸・上総・下総・常陸・下野七国高麗人千七百九十九人_一、
遷_二于武蔵国_一、始置_二高麗郡_一焉。

〔書き下し文〕

辛卯、駿河・甲斐・相摸・上総・下総・常陸・下野、七国の高麗人千七百九十九人を
以て、武蔵国に遷し、始めて高麗郡を置く。

〔現代語訳〕

靈龜二年（七一六）五月辛卯（十六日）、駿河・甲斐・相摸・上総・下総・常陸・下
野、七国の高麗人千七百九十九人を武蔵国に移住させ、始めて高麗郡を置いた。

※靈龜二年当時の武蔵国の守（国司の長官）は、大神朝臣狛麻呂である（『国司補任』）。

【「七国」における高句麗関係地名】（第1図）

駿河国

甲斐国↓巨麻（こま）郡

相模国↓大住郡高来郷（※ 郷内に高麗山がある）

↓高座（たかくら）郡高座郷

上総国

下総国

常陸国↓信太郡高来郷

下野国↓都賀郡高栗郷（※「コウくり」と読めるので参考までに）

『和名類聚抄』
『和名類聚抄』
『和名類聚抄』

『和名類聚抄』
『常陸国風土記』
『和名類聚抄』

2. 朝鮮半島からの移住者の移配

▽『日本書紀』持統元年（六八七）三月己卯条

三月乙丑朔己卯、以_二投化高麗五十六人_一、居_二于常陸国_一。賦_レ田受_レ稟、使_レ安_二生業_一。

〔書き下し〕

三月乙丑の朔にして己卯、投化高麗五十六人を以て、常陸国に居らしめ、田を賦え

稟（扶持米）を受けて、生業を安からしむ。

〔現代語訳〕

三月十五日に。投化した高麗五十六人を常陸国に住ませ、田を賦与し穀物を給付して、
生業を安泰ならしめた。

▽天平宝字二年（七五八）八月癸亥条

癸亥、歸化新羅僧卅二人、尼二人、男十九人、女廿一人、移_二武蔵国閑地_一。

於_レ是、始置_二新羅郡_一焉。

〔書き下し〕

癸亥、歸化せる新羅僧三十二人、尼二人、男十九人、女廿一人を武蔵国の閑地に移す。
是において、始めて新羅郡を置く。

〔現代語訳〕

八月二十四日に、歸化した新羅の僧三十二人、尼二人、男十九人、女廿一人を武蔵国の
閑地に移住させた。このとき初めて新羅郡を設置した。

▼『続日本紀』天平宝字四年（七六〇）四月戊午条
戊午、置二帰化新羅一百卅一人於武蔵国^一。

〔現代語訳〕

天平宝字四年四月二十八日、帰化した新羅の百三十一人を武蔵国に置いた。

★武蔵国高麗郡・新羅郡内の郷（『和名類聚抄』）

高麗郡しりぎ＝高麗郷・上総郷

新羅郡＝志木郷（志樂郷か？）・余戸郷あまるべ

3. 建郡前後の高麗郡（富元久美子氏説の紹介）

①古墳時代の高麗郡

高麗郡は、近世高麗郡の郡域、日高市内に存在する高麗神社・聖天院・高麗王若光廟などの位置から、入間郡の中央部分を割いて作られたと考えられている。

高麗郡建郡以前の、現入間郡市における古墳時代の遺跡分布 **（第2図）**

武蔵野台地は多摩川が形成した古い扇状台地で、厚く堆積した砂礫層により台地内の水利に乏しく溜め池・用水路なども効力を発揮しづらい地質環境。

弥生時代以降、効率的な土地利用は河川下流の台地縁辺に限定される。古墳時代の集落・古墳は、越辺川・入間川・柳瀬川下流および荒川による沖積低地に面した台地縁辺に集中。

入間郡内奥には広大な空閑地が広がることとなる。

↓**空閑地A**（日高市・飯能市を中心とする地域）

＝縄文時代の終焉とともに遺跡数が激減。弥生時代の遺跡は確認されず。

古墳時代中期の短期的な集落は確認されている（日高市明婦遺跡・飯能市加能里遺跡など）が、七世紀代の集落は検出されていない。

↓**空閑地B**（武蔵野台地内奥）＝開発は近世・近代以降

〔建郡直前の七世紀代の空閑地A〕

定住耕作者がほとんど存在しないような状況にあった。

〔建郡時期の八世紀代の空閑地A〕

遺跡数が劇的に増加する。

←

〔入間郡内には、七世紀の段階で広い面積の未開発の閑地があった〕

〔『続日本紀』に記された高麗郡建郡とほぼ同時期に、空閑地Aが新規に開発された〕

②移住の痕跡

〔堂ノ根遺跡・飯能市大字芦荊場〕

第一次調査（一九八九年）＝出土遺物から、堂ノ根遺跡1号住居跡の居住者は、建郡当初、生活道具一式を携えて常陸国から移住してきた人々と判断できる。衣食住の中では優先度が低いと思われる食器を多く携えて来ていること、食器が有蓋有台坏ばかりであることなど、移住者は比較的富裕な層と推定できる。

常陸産土器と共伴した土師器皿（在地生産品）から八世紀前葉と推定できるので、堂ノ根遺跡の居住者は、七十六年に極めて近い時期に移住してきたと考えられる。

←

建郡時期、一遺構から一定量の器種がセットで出土した例は今のところ堂ノ根遺跡だけ。ただ、空閑地Aでは他に相模・甲斐・下総の土器の出土例がある。

日高市常木久保遺跡（常陸国の土器が出土）

同小河原遺跡（相模・下総国の土器が出土）

飯能市新堀遺跡（甲斐国の土器が出土）

4・高麗郡建郡の史的意義

①田中史生氏説
国家構造に諸蕃・夷狄を必要とする日本型中華思想（小中華主義）を認める立場から、国内に高麗王を創成し、高句麗を王権（化内）に取り込んだのが高麗郡の建郡だったとする。

②宮瀧交二氏説
高麗郡建郡の背後に日本型中華思想があるとして、高句麗を従えているという唐向けのアピールとして高麗郡を建郡したとする。

③荒井秀規氏説

若光への高麗王の賜姓は、百済王家の創始と同じく高麗王家（高句麗王家）を日本国内に創始したものとした。文武二年（六九八）に、高句麗の後身である渤海国（震国）が建国されるが、渤海の台頭を前に大宝三年（七〇三）正月～五月に日本に滞在していた新羅国の国使に、日本国内で高句麗を復興させたことをアピールするため、四月に若光へ高麗王姓を下賜したと推測する。

【中野私見】

若光へは「王姓」を賜与したのであり王として冊立したものではない。しかし「王姓」とは親王・諸王に下される「王」号とは異なり、明らかに外国君主の地位を想起させるものである。「（高麗）王」という姓は、百済王冊立と合わせ、「外国君主を冊立する天皇」という立場と関係があると言えよう。三氏の主張は細部において異同があるが、（日本型中華思想＝小中華主義）があることは認められるのではないか。

高麗郡建郡の背景―結論にかえて

高麗郡建郡の史的意義

- ①日本型中華思想（小中華主義）の根拠としての高麗郡
- ②武蔵国の空閑地開発のための移住
- ③先進文化・技術の拠点（製鉄・瓦製造・絹織物など）
南比企窯跡群・東金子窯跡群（第3図）
- ④東山道武蔵道の西側に支援集落を形成
霞ヶ関遺跡Ⅱ入間郡家（第3図）との関係

残された謎

なぜ、高句麗人だけが集住させられたのか？

【付記】新羅郡建郡について

〔百済郡・高麗郡→百済も高句麗も七世紀後半に滅亡している
新羅郡→新羅は、新羅郡建郡時に存在している〕

← 新羅郡建郡の背景を、百済郡・高麗郡と同列に論じて良いのか？

【参考文献】（引用順）

赤木隆幸「資料解説講座（古代）「古代高麗郡関係史料を読む」②」平成二六年六月二八日
富元久美子「渡来人による新郡開発―武蔵国高麗郡―」『古代の開発と地域の力』（古代東国の考古学3）高志書院、平成二六年五月
田中史生『「王」姓賜与と日本古代国家』、『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房、平成九年八月、四五頁。
宮瀧交二「高麗郡の設置と渡来人」『名栗の歴史』上、飯能市教育委員会、平成二〇年三月。
宮瀧交二「古代武蔵国高麗郡をめぐる研究の現状について」（野田嶺志編『地域の中の古代史』岩田書院）、平成二〇年六月。
荒井秀規「渡来人（帰化人）の東国移配と高麗郡・新羅郡」（専修大学社会知性開発センター『古代東ユーラシア研究センター年報』一、平成二七年三月）、二七頁。
中野高行『古代国家成立と国際的契機』同成社、平成二九年八月。

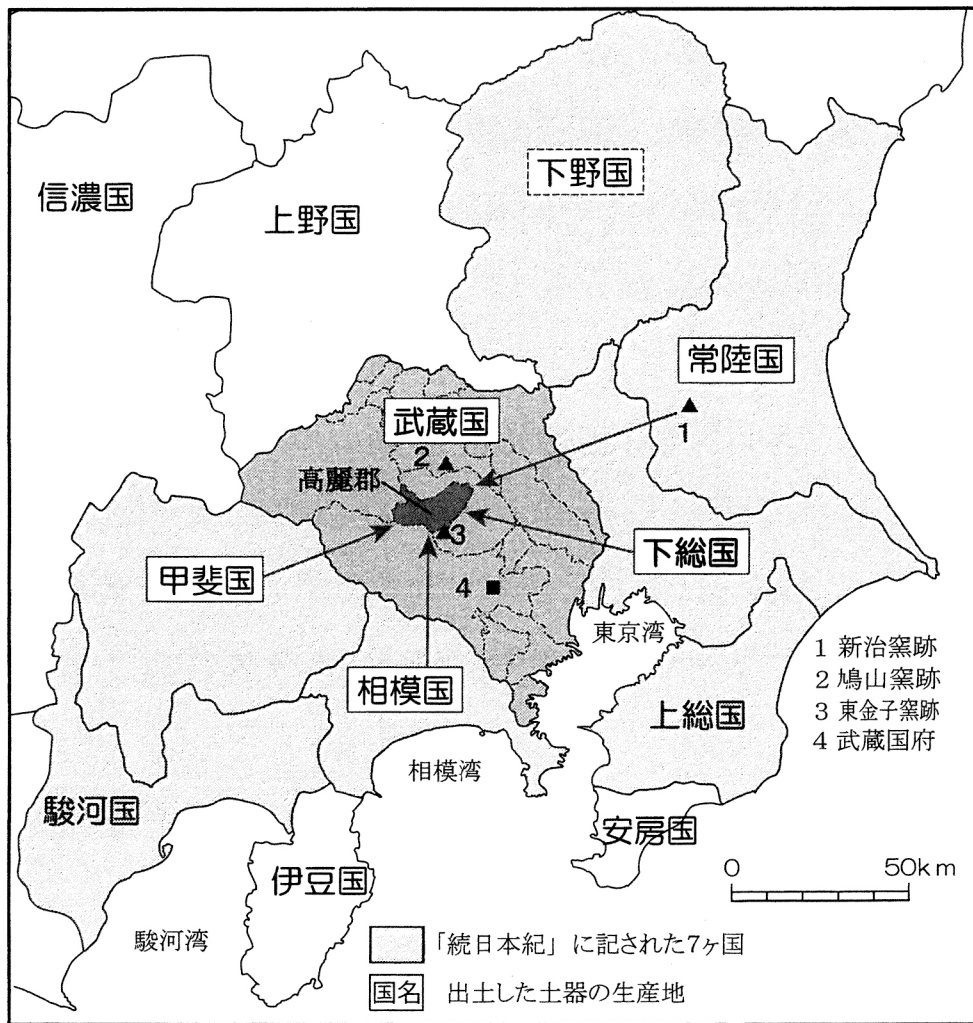
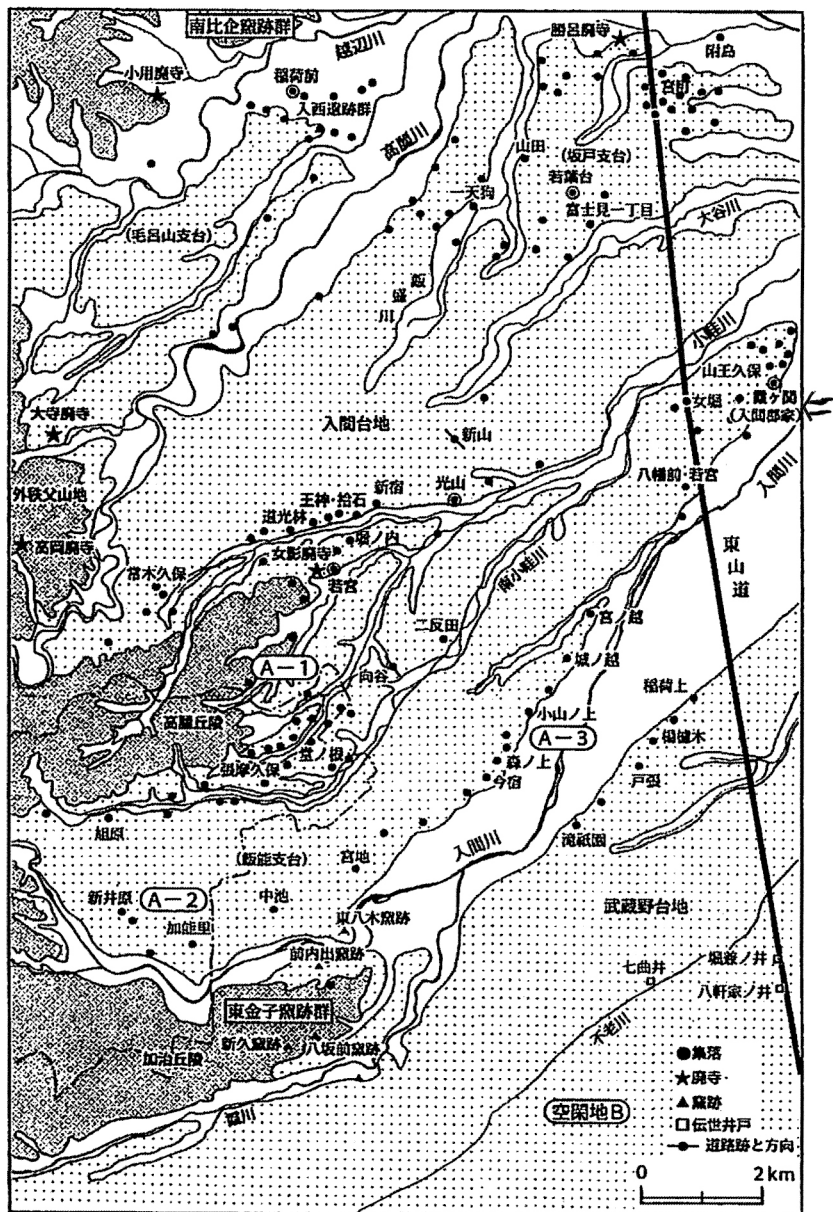


図1 「続日本紀」に記された7か国と
日高・飯能の遺跡から出土した土器の生産地



第3図 現入間郡市の地形と八世紀の主な遺跡分布(1/125,000)